

第37回区民車座集会意見交換内容（多摩区）

- 1 開催日時 平成30年9月22日（土） 午後1時30分から午後3時5分まで
- 2 場 所 川崎市立菅小学校 視聴覚室
- 3 参加者等 参加者12名、傍聴者等12名 合計24名

<開会>

司会：それでは、定刻となりましたので、ただいまから第37回区民車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めます多摩区役所危機管理担当の後藤と申します。よろしくお願い申し上げます。

今回は、「防災でつながる地域の輪」をテーマに、区総合防災訓練の振り返りを行いながら、地域防災力の向上に向けた取り組みの可能性について意見交換してまいります。

本日は、区総合防災訓練に御協力をいただきました団体の皆様、また、日頃から防災に高い関心をお持ちの皆様、さらに、多摩区と多摩川を挟んで接し、水防訓練などで連携をさせていただいております狛江市消防団の方にも御参加をいただいております。

次に、行政からの出席者を紹介させていただきます。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願い致します。

司会：石本孝弘多摩区長でございます。

区長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：それでは、福田市長から御挨拶を申し上げます。

市長、お願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん、改めまして、こんにちは。今日は車座集会に御参加いただき、誠にありがとうございます。

こんなに近いのにマイクを使っているのも、インターネット中継のためですので、御容赦いただきたいと思います。

37回車座集会をやっていますが、恐らく防災のことで特化してやったというのは、ちょっと僕、記憶がないので初めてではないかなというふうに思うんですけども、昨年から、御案内のとおり、各区で2回ずつ総合防災訓練をやっております。より体験的というか、その地域の実情に合ったものをそれぞれの区の工夫でやっていただくということで、皆さんには本当に大変お世話になっていると思うんですが、今日は、本当にこの数カ月だけでも、日本中至るところで自然災害が起こっていて、もはや本当に災害列島に私たちは住んでいるんだなということを思い知らされていますが、各災害で川崎市の職員がお手伝いに行かせていただいていますけれども、そのときに感じて返ってくる言葉が、共通して、やはり「日頃の地域力があるところというのはやっぱりいざというときにも強いよね」というふうな言葉が返ってまいります。

私たちの地域は本当にこれからも大丈夫かということは、やはりほかのそういう災害の被災地に比べて、非常に人口の密集度合いも高いですし、そして、地域の関係が希薄になっているということも考えるとものすごく不安になるということでもありますから、是非、こういう、皆さんが取り組んでいただいている活動をみんなで重ね合わせていってうまく連携していくという、その強さを日頃から、いつ来ても大丈夫なように

備えてまいりたいというふうに思いますので、今日は区民車座集会を通じて、また一層の連携につながって
いければなと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

(拍手)

<進行方法>

司会：それでは、本日の進行方法を御説明いたします。

初めに、区総合防災訓練に御協力をいただきました3団体の防災への想い、訓練の取組の状況などについて
発表をいただきます。

発表の方法につきましては、当日の写真や日頃の防災への想いなどを録音してまとめた映像作品、デジタル
ストーリーテリングを事前に作成しておりますので、こちらを上映させていただきたいと存じます。

皆様には、このデジタルストーリーテリングを見ての「気づき」や、日頃の経験などを踏まえまして、防
災について市長との意見交換を行っていただきます。

なお、意見交換前には、お手元のボードに一言、皆様の「気づき」や「想い」を御記入いただきまして、
意見交換に進みたいと存じます。

それでは、デジタルストーリーテリングの上映に移らせていただきますので、市長・区長は席の移動をお
願いいたします。

一つ目は、今月2日に訓練を行いました菅町内会のデジタルストーリーテリングです。菅町内会は日本でも
有数の規模を持つ町内会ですが、大組織ならではの苦労も乗り越えられ、訓練を実施されました。

デジタルストーリーテリングのテーマは「減災意識の高揚に向けて」です。

それでは御覧ください。

(菅町内会デジタルストーリーテリング上映)

続きまして、昨年度、訓練を実施した生田中学校避難所運営会議のデジタルストーリーテリングです。生
田中学校は区総合防災訓練の初めての会場となりました。

テーマは「日ごろからのつながりづくり」です。

それでは御覧ください。

(生田中学校避難所運営会議デジタルストーリーテリング上映)

最後に、昨年度の2回目の訓練である中野島小学校避難所運営会議のデジタルストーリーテリングを上映
いたします。訓練は小学校と避難所運営会議との連携を意識して行われました。

テーマは「学校と連携した防災訓練」です。

それでは御覧ください。

(中野島小学校避難所運営会議デジタルストーリーテリング上映)

作品の上映は以上になります。

市長・区長はもとの席にお戻りください。

<意見交換>

司会：これから意見交換となりますが、御覧いただきましたデジタルストーリーテリングを見て、気づかれた点や日頃の皆様の防災への思いなどを参考に、お手元のボードに一言ずつ、キーワードのような形でも結構ですので、御記入をお願いいたします。

ボードは、意見交換の二つのテーマごと、一枚ずつ御用意しております。お書きいただいた内容をもとに市長からお声かけをさせていただくといった方法で意見交換を進めていただきたいと思います。

5分ほどお時間を用意しておりますので、御記入をお願いいたします。

皆さん、ボードは二つありますので、二つともお書きくださいますようお願いいたします。

(ボードへの記入)

時間前ですが、皆さんよろしいでしょうか。

それでは、意見交換に移らせていただきます。発言の際は、多くの皆様に御発言をいただきたいという趣旨から、1回につき3分を目安とし、時間になりましたらこのような表示をさせていただきますので、発言の取りまとめの御協力をお願いいたします。

それでは、ここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：はい。ありがとうございます。

まず、デジタルストーリーテリングって、初めて私は聞きましたけど、3分間か4分間の映像の中で、非常に、あ、すごく分かりやすい、映像と語っていただいている皆さんの説明が非常に分かりやすかったなあと思って、何となく、この地域ではこういうことをやっていたのかということ、本当にわずかな時間ではありますが、分かった気がいたしました。

さあ、早速ではありますけども、始めに、これを見ていただいてどう感じたかというのを書いていただいたと思うんですけども、ちょっとこちら側に向けていただいてもよろしいでしょうか。

それぞれおもしろいキーワードがあって、この「関心は行動力とイコールではない」というような、ちょっと御説明をいただいてよろしいでしょうか。どうぞ。

伊藤さん：いきなり最初にくるとは思わなかったんで、すみません。私は中野島小学校のPTA会長の伊藤と申します。

それぞれの地域の取組、見せていただいて、なるほどというところなどもあったんですが、私もPTAの活動とかも、それから避難所運営会議のほうにも参加していろいろやっていますが、市民のみならず国民の防災に対する関心というのは間違いなく高くなっている、もう、ものすごく高くなっていると思うんです。

では、じゃあ、今まで町会さんとかがやっている防災訓練とか、こういったところに実際に参加してみようと、実際行動してくださっている方というのは、まだまだ一部なのかなと。先ほどもやっとなりのつながりが、少しつながりができたということで、まだ、行動と完全に一致はしていないのかなという、決して悪い意味ではなくて、関心は大分高まってきているところでこういった動きが出てきたので、これが極力イコールになるように、そのためにはちょっといろいろあると思うんです。

実際、共働きの家庭が非常に増えているので、関心はあるけどそんなこと言っていられない、家事で精一杯、こういったことにはちょっと踏み込めないという方も多いと思うんですが、そうなる職場でお休みがもうちょっと気軽に取れるような社会の全体のつくり方が、もう、関わってくるとは思うんですけど、今のところはまだ関心とイコールにはなっていないなというところで、すみません、決して後ろ向きではないです。

市長：ありがとうございます。

この議論のスタートとして、いいキーワードをいただいたと思います。

先ほどの、寺澤さんの語っていただいた中でも、こういうプロセスを呼びかけるということによって新しい人たちが関心を持っていたか、地域に気づきがあったというふうなことをお話ししていましたが、今の伊藤さんの話を受けて、今やってみてどう思いますか。

なかなか、まだ、伊藤さん言われるように、関心は高まっている、市民の意識も高まっている、だけど実際の行動につなげられていないんじゃないかというのを、寺澤さんが地域を歩いている中で、いろいろ感じられたと思うんですけども。

寺澤さん：そうですね、まず、私たちは、避難所自体を皆さんにお伝えしなければ事が始まらないので、その発信場所を増やす意味でも地域の大きな団体の方たちと一緒に行動するのが早いかなという思いがありました。それを広げることによって、私も100人ぐらいの方には避難所の話とかそういうことをお話ししてきたんですけども、この発信場所としては、住民の方に対してすごくいい関係になれるのではないかなということと、あとは、なんか、町で出会ったときに、顔と顔で知り合いになれて、そこからまた伝えるべきことが伝えられる、そういうつながりが徐々にできていると思います。

前回は中学校でやったんですけども、今回、三田小のほうでまた防災訓練があるんですけども、それをとともうまく引き継いでいただいています。そちらで繰り返すことにより、また強いつながりができ、また発信していただいて、住民の方が多く参加していただいて興味をいただく、そこからがスタートだと思っています。

あとは、それを皆さんの自治会とかマンションとかで持ち帰り、今日、その部分を少し強めていただいて、まちの中で、今度振り返って訓練が行われるときに、そこからまち全体が、皆さんで参加できるような形をつくっていったらなという、その出始めです。

市長：ありがとうございます。

ちょうど同じ、ストーリーテリングのところで出てきていた、寺澤さんが歩いていた己斐さんのところ、施設についてですが、先ほど映像に出ていましたよね。今まで、こういう関わり、防災と地域で関わっていたというふうなのってありましたでしょうか。

その後、近藤さんのところにお伺いしたいと思います、子育て関係で。

その後ちょっと、セブンイレブンの取組などを聞きたいと思いますので、ちょっと考えておいていただければ。

じゃあ、己斐さん、お願いします。

己斐さん：私どもは三田あすみの丘という施設なんですけれども、施設が建てられたのは平成5年ということで古い施設ではあるんですが、私どもの法人が移ってきたのはまだ10年前と、移管を受けた関係で、三田、この生田の地域でも10年しかお付き合いとか、事業を展開させていただけていない状況で、かつ私どもの法人、実は川崎市の法人ではなく広島から来た法人なので、そうすると地域の方との関わりというのが全然できていないという現状がありました。

その中で、どうしても寺澤さんがお住まいのマンションと消防のほうでの協力はさせていただいて、避難訓練を年1回一緒にはさせていただいていたんですけども、それだけあってそれ以上の地域とか、小学校さんだったり中学校さんだったり、それこそ今回、寺澤さんに声をかけていただいて、中学校での防災があったときに、地域の方々と顔を合わせるということのはほぼゼロに近い状況で、地域の方にも私たち認知されていないような残念なところではあったんですけども、そうなってくると、今回本当にお声がけ

をいただけたことで、私たちも自分たちの施設だけを守るのではなく、やはり何か災害があったときに地域で、御高齢者さんなり障害をお持ちの方が避難所に逃げられた後に、そこでやっぱり、受け入れが難しい人たちというのは、受けないといけない受け皿ではあるというふうには認識はしてはいたんですけども、それが、より今回参加させていただくことで具体的に考えることができるようになりましたし、じゃあその中で、実際私たちも受け入れのキャパというものは存在するので、どういった方々たちを一時避難所からお受けするべきかということを考える機会にもなったという部分と、実際受け入れるにしてもお互い顔が見えるか見えないかで頼みやすいとか頼みにくいか、そういったところも少し見えたのかなあというふうには、今回感じさせていただいています。

市長：ありがとうございます。

生田中学校地域で、山吉さん、このメンバーでやっていただいたんですね、ちょっと後でお話聞かせていただきます。

そういう意味では、「閉ざされた保育所」という、なかなかセンセーショナルなキーワードできたんですけども、己斐さんのところもある意味、閉ざされた高齢者施設だったというところが、お声がけによって、気づきがあって、自分たちの役割という地域の中の施設というふうなものに気づきがあったということ、これは、すばらしい例だと思うんですが、さあそこで、近藤さんのところで「閉ざされた保育所」というのはどういう意味なのか、もうちょっと説明していただけますか。

近藤：センセーショナルなタイトルをつけてしまいましたけど、私たちは、「至誠館なしのはな保育園」という保育園を今運営しています。70名定員の保育園です。0歳児から2歳児までが約30名、そして3歳児から5歳児までの幼児を40名。それに対して正規の職員18人、パートも入れるともっといるんですけども、これがシフト制で勤務をしているという状況です。

災害がやはり起きたときに、この70名の子供を、12、3人で対応する、守る必要があり、子供の安全確保だけで我々も手いっぱいな状況になっている。そういったところで、やはり子供の安全を守るために、是非地域の皆様の力、そして知恵をお借りしたいというふうに思っています。

今回のこのストーリーテリングを見させていただいて、本当に様々な取り組みを地域でやっている、そうしたことも私、本当に恥ずかしながら勉強不足で理解ができていなかったものですから、こういったところにやはり参加をして、そして自園の保育のマニュアルであるとか、防災のマニュアルであるとか、また、ちゃんと動けるような行動をできるようなものをもっと充実させてつくっていきたいというふうに考えております。

市長：ありがとうございます。

確かに、70名近くいる子供さんたち、それも小さい子供さんたちの命を守っていくのに、日常だったらそれで回るかもしれないけども、いざとなったときにはなかなか厳しいと。けども、必ずしも、一時的には保育士さんたちが守るんだけども、地域の力というふうなのがあればもっと救えるというか、助かるというものがあるということを知られたというところで、本当に先ほどの己斐さんともすごく似たような、ですから、いかに地域に自ら開いていくか、つながっていくかということが、自分たちを守ることなんだというこの気づきが、今出てきたんじゃないかなというふうに思います。

そこで、矢崎さん、事業者として、セブンイレブンさんも本当に地域の中にもものすごくたくさんあるので、そういった意味では、私たちの町にとってもコンビニエンスストアというのは非常に大きなインフラであると思うんですが、日常的にも、いざというときもそうですし、日常的にも皆さん、かなり、お客さんというのは顔の見える人たちというのは多い中で、日常のコミュニケーションの大切さということを書いてい

ただいでいました。少しコメントいただけますか。

矢崎さん：この車座に参加する前に、市民検討会議、7区で行われたんですけど、全部参加させていただいて、市民の方々の最初の不安って何だろうという、課題は今の地域のコミュニティーだということも多く教えていただきました。

その中で、今多摩区の中では、弊社は37店舗運営させてもらっているんですけど、これは一店一店独立した事業主様が、そこに、地域に根差して商売をさせてもらっています。日常からやっぱり地域の便利さの拠点として皆様に使っていただいているんですけど、昨今、いろんな自然災害が起きています。じゃあ、その地域の加盟店オーナー様は何をされているかという、店を開け続けることということをしてもらっています。実は、加盟店オーナー様も全員被災者です。被災者であるんですけど、地域のお客様、日頃の感謝の表れというところでやってもらっています。

じゃあ、そのためには何が必要なかというと、やっぱり日頃のコミュニケーションが大事で、日頃から顔の見える商売をさせてもらっていることで、この近所の誰かがいない、あの人に来ていないとかそういうところも実は加盟店オーナー様のほうからはるかに気付いている。じゃあそのお店をどのように運営し続けるために本部として、商品の提供であるとかシステムであるかというのを日々考えています。

今日も皆様のストーリーテリングを見ている中で、やっぱり地域とのコミュニケーションの軸となる部分になっていかなければ、皆様との共同であるとか市民の皆様にもどのように、本当に有事のときが一番大事だと思いますので、そのためには日頃のコミュニケーションというのをもう一度考えさせられる場だったかなと思っております。

市長：ありがとうございます。

確かに、コンビニエンスストアだとナショナルチェーンなので、地域というふうな感覚、どうなのかと思っておりましたが、それぞれの店舗は、オーナーさんは大体地域の人ですものね。そう考えると、非常に地元密着という色はすごい強いんだというのを改めて認識させていただきました。

今日は、隣の狛江市さんから消防団団長さんに来ていただいて、井田さんも、両方消防団に並んで座っていただいておりますけども、お二人とも同じようなキーワードで「人とのつながり」と書いていただいているのと、井田さん、「連携」と書いていただいているので、まさに隣同士うまく連携していこうということなんだと思いますが、ちょっとこのストーリーテリング見ていただいて、このキーワード、ちょっと一人一言ずつコメントをいただけますか。お互いの連携も含めて。

富永さん：狛江市消防団団長の富永です。よろしくお願ひします。

通常時はもちろん人とのつながりというのは、当たり前のようにもちろん大事だと思うんですが、非常時においては、なおさら、通常時の人とのつながりを生かして避難所に避難したりですとか、その行動が大事になってくるかと思っております。

私、今、消防団23年目に入っておりますが、今まで消防団員として放水訓練ですとか、関わってきましたが、昨年からの立場になりまして、いろいろ機会をいただいて、こういう各小学校とかの避難所運営協議会とかの訓練のところも見させていただきましたけれども、地元の防災会もそうですし、学校の避難所運営もそうなんですけれども、私の持ったイメージとしましては、55歳から60歳以上の方々の参加はとても参加率は高いと思って、その人のつながりはいいと思うんですけども、我々、狛江市消防団、今大体平均年齢が38、9ぐらいなんですけれども、大体35歳から50歳ぐらいまでのところの人のつながりというのが、こういう防災訓練ですとか、そういうところで、あまりちょっと、今の現状では、狛江市、ちょっと弱いのかなと感じているところでございました。

それが、今も狛江市、先週から各地域でおみこしのお祭りとかやっているんですけども、例えば自分だったら今は消防団の立場で、また違うところではそのお祭りの立場でとか、まず人がつながっていただいて、その先、防災訓練ですとかそういったところに、その辺の35歳から50歳ぐらいの方々が徐々に参加していただいて人と人がつながっていただければ、万が一のときにはお互い助け合えるのかなと思って、このテーマにさせていただきました。

市長：ちなみに、富永さんはお幾つのときから消防団に入られていますか。

富永さん：23です。

市長：すごいですね。やっぱり若いときから参加というのは、とても大事ですよ。

富永さん：そうですね、はい。

市長：井田さん、すみません。引き続いて。

井田さん：私は多摩消防団やらせていただいている井田です。よろしくお願いします。

私は、地域の連携というのは、私がいつも思うのは、皆さんが、知っている人同士がお互いに話をできるということは、いろんな団体と行動を共にしたらいいんじゃないかなと思って、災害にはと、私は思っています。

あと、それから、私たちは立場上消防署に勤務するようになっちゃみたいな話なんですけど、もしできれば、治まるまではちょっと行かれなくて、それからという形で、私は市長にお願いしたいんですけど。私は臨時職員なものだから、よろしくお願いします。終わります。

市長：はい、ありがとうございます。

実は、富永さんからすごく良い振りだったなと思ったのが、濃沼会長の若い世帯の方々のコミュニティの形成というところで、若者がどう関わっていくかということなんですか、ちょっと濃沼会長からコメントいただけますか。

濃沼さん：今はメディアとかそういうところで、いろいろ自然災害の状況を、若い世帯もテレビとかあるいは新聞を通していろいろ把握していると思うんですけども、実際にこういう防災訓練とかそういう場を設定しても、なかなか若い人がそれに参加していただけないんですというのが一つあって、それで、若い世帯の皆さんがお互いに協調し合っているのかなと、お互いに何かあったときに助け合える状況になっているのかなというのが心配で、つい先日、菅の地域、学校関係との懇談会というのがありまして、その席でもちょっとお願いをしたんですけども、PTAの皆さんとかそういった方を通して、できるだけ防災の意識をお互いに持っていただいて、何かあったときにPTAの皆さん同士でもいいし、協力し合って、こういうふうにしようよというようなことをぜひ考えてほしいなということで、ちょっと申し上げて御依頼をしたんですけども、どの程度浸透したかどうかはちょっと分からないんですけど、そういうことで、大体この多摩区の地域でも少しずつお年寄りがふえているという中で、お年寄りだけではなかなか、昔は若かったのもそれぞれ助け合うことができたと思うんですけど、お年寄りがお年寄りを助けるというのはなかなか難しいので、若い世帯がお年寄りを助けるという仕組みがうまくできるといいなというふうに思って、書かせていただきました。

市長：ありがとうございます。

じゃあ、霜田さん、いってみましょうか。そろそろ若い世代の話ができたから、そろそろ私かというふうに思っておられると思いますが、専修大学でボランティアをされているというふうに聞きましたけど、ちょっと、その団体の紹介も含めて、いいですか。

霜田さん：専修大学生ボランティア、通称S I Vという、防犯・防災をメインに活動をしている団体の代表をしております霜田と申します。

私が今回書かせていただいたのが、「自助・共助の大切さ」という部分なんですけど、これをなんで書いたかといいますと、災害が起きてから救援物資とか救助が来るまでにおよそ最低でも3日かかると言われていると思うんですけど、今、先ほど市長さんからもお話があったように、北海道から九州のほうまで、日本各地で災害が起きていて、日本中が切羽詰まった状態で、今、もしこの関東圏で大災害が起きたときに、通常よりも絶対に救助とか救援物資が届くまでには時間がかかると思うんですけど、その間にやっぱり何が一番大切になってくるかということ、そういう地域のつながりとか自分たちで何ができるかという、自助・共助の大切さの部分が一番重要になってくると思うんですけど、それに対してやっぱり防災に対しての意識が高い人はやっぱりまだあまり多くはないと思うんですね。

それに関しまして、私のS I Vの団体では、まず部員には災害救援ボランティア講座という防災に関する講座がありまして、まずそれを受けることを促しております。それを受講していただいて、まず防災に関する知識とか意識を高めてもらって、あとは上級救命講習という応急手当に関する講座とかも受けてもらって、目の前にけがした人がいたらどういふふうに応急手当をしなければいけないのかという部分、学んでもらったりして、まずそういうところから防災意識を高めるように工夫しております。

あと毎年、今年も行ったんですが、8月に3. 11でかなり大きな被害を受けた石巻市のほうに夏合宿に行かせていただいて、そこで大川小学校などのそういう震災遺構などを見たりして、あとは現地の小学生たちと一緒に運動会みたいなことをしたりして、「専大まつり」という名前で開催しているんですけど、そこで今年も防災系のゲームなどをやらせていただいて、現地を直接見て知ることでもっと部員たちの防災意識の向上に努めているって感じです。

市長：ありがとうございます。

これ、区長から発表してもらったほうがいいと思うんですけども、区のアンケートなんかをとっても、意識は高いんですね。さっきの伊藤さんの話じゃないですけど、実際に備えている人たちというのはそんなに多くないという、そんなようなアンケート結果だったですよ。ちょっといいですか、補足してもらって。

区長：多摩区は、本当に地形からすると大雨のときに浸水する被害を受けるような地域と、それから大雨のときに土砂災害、いわゆる丘陵地で、多摩丘陵の端のほうで土砂災害を受ける、そういった地域の二通りの災害に備えなきゃいけない。また、地震のときはもちろん、区域全域が被災する可能性が高いと思いますけれども、そういった中で、やはり地域の方々への区民アンケートでは、2年に一遍、区民意識調査というのをやっております。そういう中でやっぱり区民の方々の一番関心の高いのは、防災に関する取り組み、特に行政側でやってほしい取組として、防災に関する取組というのが一番関心が高かった、そういった状況です。

そういった中で、やっぱり災害が他の地域で起こると、そのことを教訓としつついろいろ対策を立て、考え、また備えをしていただくということには関心が高まるんですけども、なかなかやはり、喉元過ぎると熱さを忘れてしまうのではないですけども、だんだん関心が薄れてしまったりという、そういう状況がや

っぱり見受けられます。そういった中で、やはり各地区ごとの防災訓練などを通じて、そういった意識を常に皆さんに自分事として捉えていただいて、それを常に備える、または考えていただくということがやっぱり必要だというふうに我々も思っていますし、そういった取組をこれからもやっていきたいなというふうに思っております。

市長：多摩区だけではないんですけども、多摩区は比較的大学が多いので学生さんたちが多く住まわっていると。おまけに多摩区も単身世帯って非常に多いですね。若い学生さんたちの単身も多いと。実は単身世帯の人たち、特に若い人たちは、備蓄しているという率、極端に少ないですね。これは、この前の川崎のtvkでちょっとアンケートしてみたんですけど、やっぱり若い人たちは、何となくコンビニ行けば何かあるんじゃないかと思っているという、そういう生活しちゃっているの。だけど、それで果たして大丈夫かなと。何となく若い学生さんたちが、自分の備蓄も大事なんだけど、今住んでいるところの地域にどう日常的に関わってもらおうかという、この意識はどうやったらいいんだろうというのは、実は僕たちもすごく手をこまねいているんです。

もう一回コメントもraitたいんですけども、部活は、活動している団体、SIVですね、SIVの人たちは意識の高い人たちですね、防災意識の高い人たち。いわゆる一般の学生さんたちに、どう、何ていうんですかね、地域の中に入ってもらおうかというためにはどうしたらいいですかね。同じ世代の代表として、少しコメントもらえるとありがたいんですけど。

霜田さん：やはり、私の友達とか私に近い年齢の子たちに防災の話をしたときに、防災についてどう考えているとかって聞くことがたまにあるんですけど、やっぱり、防災って何みたいな、結構そういう、そうですね、関心が低い人たちがやっぱり多いという現状がありまして、次のテーマにちょっと書きちゃったんですけど、やっぱり若い年齢層に広げていかなきゃいけないというのが今一番課題だなと思っていて、最近SIVの活動としては、主に小学生以下の子供たちになっちゃうんですけど、その小学生の子たちをメインにどういうふうに防災を広げていけばいいのかというので、この前の区の総合防災訓練のときも新聞スリッパのつくり方などをやらせていただいたりして、そういう、ちょっと遊びとか、そういう工作系のこととかを交えながら、小学生とかそういう若い人たち向けには、そういうところから興味を持ってもらっていくのが一番いいのかなというふうに、私は思っています。

市長：例えば、いざというときに、例えば霜田さんが己斐さんの施設の隣に住んでいたということがあってですよ、日頃から、いざとなったときに霜田さん頼むわねと、ちょっとおじいちゃんおばあちゃんのところで見ていてくれるだけでいいからというふうな話のときにつながっていれば、あるいは近藤さんのところの子供の施設で、そこでケアしてくれとまでは言わないけども、こうやって見守ってどこかに行っちゃわないように見ておいてくれるというふうなことがあれば、一被災者というよりも助ける側に若者の力ってなるじゃないですか。そういうふうなのに、どうやって持っていったらいいのかなというのは、次のテーマにも関わってくる話だと思うんですけども、これも会長、非常に難しいテーマですけど、どうですかね。やっぱり防災訓練をやっても若者のところは参加率が少し少ないですよ。このことについて何かコメント、伊藤さんPTAですよ。ちょっと難しいテーマになっちゃいますけれど。

伊藤さん：そうですね、PTAの活動を通してなんですけれども、今ずっと意見が出てきたことが、一PTAの中でも起こってしまっていて、皆さん防災に関してもそうですし、子育てとか地域の防犯とか、そういったことの興味というのはいくらあるんですけど、じゃあ皆さんPTAの役員とか、例えば委員会活動をちょっと一歩を踏み出してやってくれませんかという、それはできませんという、なかなかさつきもそうなんで

すけど、興味はあるけどイコールにはならないといったところがありまして、ちょっと答えになっていないんですけども、ただ、実際に学校で防災訓練とかをやっている子供たちはどうかっていいますと、かなり関心はすごく持つんですね。

消防団の方々が、ちょっと話前後して申し訳ないんですけど、多摩区は特にまだ消防団の方々がすごく地域に密着して小学校の教育とかにも関わってくださっているんですね。すごく、そういう意味では非常に恵まれた地域ではあると思うんです。そういった消防団の方のお手伝いもあって、子供たちは関心も持っていますし、ただ、そこをどうやってじゃあ学校以外のところにまで持ってくるか、お父さんお母さんたちも引っ張って持ってくるかというのは、すみません、答えにはなっていないんですが、どうにかできないかという、例えば私たちの父親の集まり、有志のいろんな小学校さんでもあると思うんですけど、おやじの会という、土日だけけどお父さんのボランティアで何か一肌脱いであげようという団体が幾つかあるんですね、多摩区にも。そういった中には、お父さんたちが学校で、じゃあ実際に何かあったときの避難所になったときのためにお泊り会を実施してみようとか、やってみたいという声も一部にはあるので、そういったことをPTAのほうでちょっと手助けして、実現できればなど、まだ全然構想ではあるんですが、考えてはおりません。

市長：ありがとうございます。

濃沼さん、どうぞ。

濃沼さん：一つ提案なんですけれども、防災の日というのは一応設定はされているんですけども、やっぱり学校だとかですね、あるいは会社だとかそういうのがお休みにならないですよ。例えば、防災の日というのを一日決めて、その日は学校も会社もお休みになる、そのかわり防災に参加して皆さん協力しましょうというようなことを、これはまあ川崎市だけではちょっと難しい話かもしれませんが、国レベルでやっていただくと、もう少し防災に対する意識が強まるんじゃないかというふうに思いますけれども。

市長：ありがとうございます。すばらしい提案だと思います。国、全体でというふうなのは、なかなか厳しい部分がありますけれども、地域ごとにこれってやっていくというのは、いい提案だと思います。ちょっとこれも検討させていただきたいなと思います。

千葉さんの先ほどのストーリーテリング、ものすごくよくて熱い思いが伝わってきました。企業を退職されてから、ますます地域貢献に力が入っているというふうな話でありましたけれども、キーワードとしては地域ネットワークというふうなのを書かれておりますけれど、ちょっとそのあたり、コメントしていただけますか。

千葉さん：私のところの一番の強みというのは、伊藤さん。PTAさんと一緒にできるというのが強みになってきています。ましてや、基本的には歴代のPTAさんの会長さんをやられた方は、それを離れないようにしておいて、ずっと続けて、伊藤さんはどうなるか分からないですけど、歴代の方は絶対に離さないような形にしているので、若い人が当然PTAの会長さんをやっているの、顔も広くなる。だから、絶対そこは、必ず何かをするときには若い人が手伝いに来てくれるというようなイメージ。それと、当然私も当然知り合いになれるし、ちょっと話が前後するかもしれないんですけど、さっき生田さんのほうからのお話で、地域にとにかくやっぱりいっぱい広がるといふか、知り合いをつくってみたいな感じの話があったんですけど、ネットワークという形があって、それで、たまたまなんですけど、行政区のやつで、中野島につながり愛プロジェクトというのが入ってきて、それでとにかくまち全ての人と親しくなろうというので、挨拶運動をやったり、いろんな全ての団体さんが来て、会合やって活動しているというのもたまたまあったわけです。

だから、そうこうしているうちに中野島町会の自主防災組織さんと、それと社協さんのほうからなんかも、私はどっちかと言うと中野島小学校という縄張りの中で生きて、ただそれはいけないと思ったけど、当然中野島小学校、中野島中学校、下布田小学校って、3校あるんですけど、そうすると、持ち場が違うじゃないですか。これまではどっちかという自分のところで一生懸命やればというイメージだったんだけど、やっぱりちょっと広げてというのは中野島町会の自主防災の関係の社協さんからの提案なんかもあったりして、そうすると全員を、とにかくまとまってやらなきゃだめだよというふうに話し合っただけで、思いっきり進めているところです。

市長：そういう意味では、防災訓練のときにいろんなものがつながってくるという感じってありましたですか。

千葉さん：基本的にはまずはPTAさん。それと、あとは近隣の幼稚園さんなんかもみんな、当然学校さん自体がすごい積極的にやってくれるんですよ。それで、学校さんが先生方がすごい協力的で、当然そうするとPTAさんも、自分たちはどっちかという、2万3,000ぐらいの人口が対象だとしても、要は500人とかぐらいしか体育館に入れることができないという状況があるので、極力その人たちに、全部の人たちの組織をつくってでも、なるべく避難所に来るんじゃないでなくて、自分たちのところで3、4日は過ごせる形にしなさいよみたいなのを、今いっぱい広報しているところで、私たちの組織だけは、とにかく全てを通じてということ、連携だけは進めようとしている最中です。

市長：ありがとうございます。

では、この前の9月2日の防災訓練の日は雨だったにもかかわらず、先ほどのフィルムにもありましたとおり、八百数十名の参加者があったということで、非常に驚くべきことだなと思ったんですけど、ちなみに「雨に注意」というふうなことをキーワードに書いていただいておりますけれども、それに関連してなんでしょうか。

田口さん：それはそうなんですけども、先ほど区長さんが言われたように、急斜面地があって、昔この辺は関東大震災では一人の死者もいなかったんですよ。そのかわりに、戦後に雨で三沢川が氾濫して水が出ているんですよ。それなのに、雨が降っている中防災訓練をやると言ったら800何人の人たちが集まってきたというのすごいことだと思うんですよ。

それで、雨についてやっぱり、ここは地震に結構強いですよ。1メートル掘ると砂利層ですから、基礎がしっかりしていると思うので、この間の3.11の時もそんなに、揺れることは揺れたんですけど、建物が傾斜したり何かなかったんですよ。そのかわり、山のほうに行くと青砥という粘土質があるんですけど、その上に関東ローム層ですとか、火山灰みたいなのが積もっていて、その上に建った家がやっぱりちょっと液状化近くまで行ったんじゃないかなというぐらいで、やっぱり水に強いようにこれから改修しましたので、川も多分大丈夫だと思うんですけども、もし土砂崩れのあったときには、大変な災害が起きるかなと思って、ハザードマップは多摩川がパンクしたということなんですけど、小さな三沢川も土砂崩れでパンクしたらやっぱり、水が結構来ると思うんですよ。

私、町会のほうも関わっているんですけど、町会の人たちが毛布を1階に置いてあるんですけど、今度2階のほうへ上げておきましょうかというような意見もありますので、やっぱり水にはちょっと注意していきやいけないかなと思います。

市長：ありがとうございます。

本当に、今回の西日本豪雨の雨量なんかを見ても、一昨年 of 広島 of 線状降水帯 of 雨量なんか見ても、あれがずっと川崎の上で留まっていたらどうなっていたらと、考えただけでも本当に恐ろしい状況ですし、何となくあのフィルムにも出ていましたけど、50年間なかったって言うても、50年前はあった話なので、そのことをやはり新住民がこれだけやっぱり増えてくると、その多摩川の危なさというか、そういうのが随分忘れられているというふうな気がするの、改めて今回の豪雨を受けて、ハザードマップだとかというふうなののがものすごい勢いで15万アクセスに届いて、川崎市 of ハザードマップで一時期だけでもそれだけありましたので、随分関心が高まっていたという思いはするんですが、やはりそれぞれの地域、自分がどこに住んでいるのかということ、一人ひとりがまず関心を持って見ていただくということ、行動につながられるような、そういう呼びかけも地域地域でやっていただきたいなと思います。

最後、一巡するにあたり、山吉さんにちょっとコメントいただきたいんですが、活動を引っ張る有能なリーダーが大切だということでもありますけれども、お願いします。

山吉さん：例えば、さっきのお話がありました、小さな子供の話ですが、我々が思い込みで何かやろうと思っても失敗するというもので、2年前に、私どもの自治会は非常に小さい自治会で、200世帯ぐらい。その中の40世帯ぐらいが12歳以下の子供がいるというので、その40世帯に対してアンケートを行った。日頃から子供たちと自治会との関係をつないで何かやってあげなくちゃいけませんねという、そういう設問だったのが、平常時にはいらないと。いわゆるプライバシーにかかわる問題は私たちがやりますと。だけでも、最後に書いてある言葉は、いざというときには私たちは勤めに出ていたり何かしますので、子供だけを何とか救ってください。こういうアンケートなんですね。

私たちは、そういうことはじゃあどうしようかということで、いざというときは、一時避難所、私たちは公園に集まるわけです。一時避難所に子供が来る。その子供はまず、一時避難所を立ち上げる前に優先的に保護する。こういうふうにした。そういうのをマニュアル化して、私たちの防災マニュアルにはそれが入っています。

そういうふうにして、じゃあそういうふうには皆さん方の住民のニーズに応じて、我々はどうアクションとるか、これが一番大切だと思うんですね。私たちの思い込みで何かやらない。必ず聞いてやるということ、我々の自治会はやっています。

私たちは、やはりいざというときに一時避難所をつくりませんが、これは精々2、3日の話で、やはり何と言っても、指定避難所、今私たちは生田中学校が避難所なんですけど、そこをいかに早く立ち上げられるか、これが決め手だと思うんですね。それで、避難を要する人たちをいかに早くここに連れて行くか。そのためには、避難所をいかに早く立ち上げるかというのが我々の自治会の課題であるというので、我々の自主防災会の班のですね、避難誘導班には括弧して、避難所支援班という括弧をして、そこはそういう形でもって避難所を早く立ち上げるということでもう提案したんです。というのを決めています。

しかし、いずれにしてもそういうふうなことをやっていくために、レベルアップするためには、まず皆さんの住民の意識を上げなくちゃいかんと。いろいろとアンケート調査をやりました。我々は阪神淡路以降、もう二十数年経っているんですけども、年2回防災訓練をやっていますが、まだ参加率は70%です。それをいかにやっていくか。それはやっぱりリーダーの、誰をリーダーにするかというのが大事なんですね。

市長：200世帯、非常にこじんまりした町会の中ならでは、参加率70%ってすごいことだと思いますけれども、いわゆる自分たちの一時避難所というふうなのを、地域の実情に合ったものを、自分なりのやつをやる、自分の地域なりの実情に合わせたものをやられている、すばらしい取組だなというふうに思わせていただきました。本当にありがとうございました。

さあ、じゃあちょっと大分時間も押してきましたんですが、2枚目のフリップを出していただいて、話を

続けさせていただきたいと思います。

ちょっと大分、それぞれの立場で何ができるのかということも先ほどの設問から、入ってきているような気がいたしますけれども、ちょっと見させていただいて。

それでは、ちょっと田口さんの「炊き出し」というキーワード、これについて。

田口さん：私は商店街の会長をやっているんですけども、調理師とかの免許を持っている人というのはたくさんいるんですね。そのために、ガスボンベがあると思うんですけど、多分家庭内のガス管とか何か破損していたり何かすると使えないので、そのボンベをちょっとお借りして炊き出しをやるというのですけれども、その中でボンベというのは、皆さん知っているか知らないかわからないんですけど、あれは逆ねじなんです。普通のねじと違って、反対側にひねらないと開かないということなので、そういうのを覚えておけば、ホースさえあればいろんなガス器具もありますから、そこで使えたら。調理師の人たちは調味料とか何かたくさん持っていると思うんですね。だから、毎回、毎回同じような炊き出しじゃなくて、味が違った温かいものも提供できるかなと思って、炊き出しと書いたんですけど。

市長：なるほど。ありがとうございます。

確かに、いざといったときのLPガスというのがとても活躍することになると思います。ありがとうございます。商店街ならではのコメントだったと思います。

寺澤さんの結いですか、「結ぶ信頼関係」。

寺澤さん：私ができることは、私は本当にただの主婦なんですけれども、避難所に関わって大卒は何か意識のある人が増えてきております。でも、実際一番大切なのは身近な人たちでそれぞれが助け合えばそこはまとまっていくと思うんですね。それには、自分が発する言葉を信じていただけるためには、日頃の防災だけではなく日常生活の信頼関係がすごく大切で、私は人と出会ったら会話を大切にしたり、相手の方が何を望んでいるか、傾聴の部分になるんですけども、それをしてとにかく寄り添うようにお付き合いをしています。それで、まちの方たちともそんなお付き合いで、皆さん優しい方で、ボランティアの方たちもたくさんいらっしゃいます、コミュニティカフェもあります。そちらのほうの方たちと今うまくつながっているような気がします。

あとは、そこに意識の高くない身の周りの方たちをどうやって意識を高めて、避難所のことを分かってもらい、そこから自分たちは何を準備すればいいのか、そして個人的に何を準備すればいいのか、それを伝えるために、今46世帯というマンションなんですけれども、やはり意識の高い人が上に立たないと、なかなか伝える場所ができないということで、今回はたまたま理事が回ってきて、自分から理事長を引き受けまして、そこで高齢の方たちから若い方たちの意見を今聞きながら、それもただ防災のために聞くのではなくて、日常生活のために聞いて、そこからコミュニケーションをとって自分が発する言葉を快く受け入れていただける、そこから相手からも声かけをしていただけるような、そういう信頼関係があれば、いざというときには自分がこうしようというときに、皆さんもやはり一緒にやりましょうという声が聞けるような気がします。

そういう信頼関係づくりが、今、大切だなと。私は94歳から両親を介護していますし、0歳から孫たちも見ていますので、地域の方の高齢化のこともすごく気になるんですね。高齢のことを知っているだけに、こういうところはこういうふうに工夫したほうがいいんじゃないという、思ったことを全て周りの方に発信して、安心していただけるよう行動するように、主婦なのでそのぐらいしかできませんけれども、小さなところから膨らんでこれたら、すごくまとまって、皆さん避難所にも連れていけて、また自分たちで、高齢の方は上の階から、住めない場合はじゃあどうしてこうか、小学校の子が共働きで親が帰れない場合は、マンションを出てどうしようか、そういうところをつながりを持って考えています。

市長：ありがとうございます。

日頃からの信頼関係、防災のいざというときだけじゃなくて、とにかくいつもつながっておくということが、いざというときのためにもなるということですよ。同じようなキーワードなのかもしれませんね、伊藤さんの地域住民の方々との協力という。

伊藤さん：協力と書いてしまったんですが、協力していただくというほうが正しいのかもしれないんですけども、小学校ではいろいろな年間の行事、特に来月なんかですと、ここの地域の多くの学校はバザーとかやるんですけど、そういったときにも町会の皆さんや消防団、もしくは消防団のOBの方々というのが、地域の中でやはり、さっきリーダーという話もありましたけど、かなり中心となって小学校に協力していただいています。

その中で、そういった方たちとの日頃からのコミュニケーションとか、気持ちよくお手伝いしていただけるために私は保護者の代表として、そういった方と顔なり信頼関係を築いていく、ふだんから築いていくということが、私としてはできることかなと。

あとは、ちょっとこの場で僭越ですが、この行政、それから学校、教育委員会にも、避難所としての機能、それから子供たちの安全・安心を守るための意見具申はしていきたいなと思っています。

今年の夏、かなり猛暑、今年に限らずここ数年猛暑が続いていると思いますが、川崎市の学校、普通教室はかなり他都市とも比べて冷房の設置率は高いというのを知りました。ただ、体育館、いざ今日、避難所と実際避難所となる体育館にはまだ冷暖房とは言いません、冷房が付いていないと思うんですね。そういったことも、それからぜひ設置の方向をお願いしたいということと、それから付けただけじゃなくて維持費ですね、維持管理していくところまでやっていただけると非常に助かります。

すみません、ちょっと。

市長：ありがとうございます。

じゃあ、千葉さん引き続いてよろしいですか。

千葉さん：さっき言ったことと前後するような形になっちゃうんですけど、やっぱり、何かのときに、自分たちの住んでいるところのことはネットワークを完結することにして、全ての人がとにかく、さっきも言いましたけど、つながってグループとか、それもたまたま市民の方が来ているだけなので、自分たちのまちだけでも、まず最初に思いっきり全ての、いろんなものが今あるじゃないですか、団体さんが。それ自体が、個々に団体さんが活動しているような形になっているんですね。それを、簡単に言うと、一つにまとまった形でやっていけないのかなというところ。ましてや、中野島の場合は、また地域自体が、わかりやすい地域なので、まとまらないでどうするのかという形なので町会と自主防災さんとか社協さんのほうで、どんどんまずは顔見知りをつくっていったからでないとも何も始まらないなと思っています。

私でさえ今かなり知り合いが増えましたので、だからそう考えると、挨拶してくれる大人から子供までいっぱいしてくれるようになったので、少しは長年のあれじゃないですけど、長年やれば絶対に何でもできるなというふうに思います。

市長：近藤さんと己斐さんから、近藤さんからちょっとコメントいただけますか。

近藤さん：閉ざされた保育所ということでお話ししたんですけど、決してそれだけではない、開かれた保育所として何をしているかというところでは、ふだんの園庭の解放であるとか、それ以外にもやはり地域の保

育園に通われていない方やママ、パパに対して地域の子育て支援センター、またこども食堂や育児相談コーナーなども実施しています。こうやって、やはり保育園での取組でパパママをつなげる取組をすることで、コミュニティが形成できるのではないかと。そのコミュニティを形成した中で、何か災害が起こった際にできることとすれば、避難所として我々の施設ですね。住まいがたくさんありますので、そういった場所での避難ができるような形を取り組んでいきたいと思いますが、やはり、とは言っても子供たち、たくさんおります、70名以外、姉妹園のほうでは、我々多摩川の近くに保育所がありますので、隣が2階建ての建物で、120名の子供を預かっているところなんですね。そうすると、あとは乳児院という施設も合築しておりますので、その子供たちを守る、それだけでなかなか手いっぱいだろうと。この姉妹園とかを改築とか、または新設をする際に、是非避難所としての機能をもっと広げていきたい。そして、そこがふだんコミュニティの場所として活用できるような何か、カフェでもいいんですけども、ターゲットがママパパだけじゃなくて、地域の高齢の方々や、本当につながるような環境をつくれればということをお願いしております。ただ、それにはお金が必要になってくることかと思っておりますので、そういったところを是非是非、川崎市のほうでも御検討いただきたいと、そういうふうに思っております。お願いします。

市長：ありがとうございます。

すみません、己斐さんよろしいですか。

己斐さん：私どもの施設は、365日24時間御高齢の方が生活されていますので、何か災害が起きたときに、じゃあ会社を休みますというわけにもいかない状況で、このたびは関東でも雨がひどくて電車が停まりましたとかあったんですが、その中でやはり、うちの勤めている職員さんたちも家庭があって、この前の話でも何件か出ていたと思うんですけど、被災者になる可能性は十分ある中で、御高齢様を、地域の方を引き受ける場を提供しないといけないなとは思いつつも、まずは限られた職員になってくる中で、うちで生活されている方の生活をいかに守るかという部分を、恐らく第一優先にしないといけない部分も出てくると思うんですが、その中でも私たちが提供できる、いらっしゃった方が安楽に不安もなく生活できる場というものと、場合によってはうちに場を提供するのではなく、うちにある、いわゆる簡単に皆さんよく耳にするのであれば車イスであったりとか、ベッドの部分であったりとかを避難所のほうに、うちで余っているものを提供することで、うちに来る一步手前の状態の方々が少しでも楽に生活できるようなものの提供であったりとかというのはできるのかなと。

そのためには、日頃から情報をしっかり共有できるような関係性があつたりとか、うちの施設がどういうものなのかというのを地域の方にも知っておいていただければ、あそこには何があるよねとか、何を願いできるよねという部分とかも、お互いに日頃から情報共有できるのかなとは思ったりはしています。

市長：ありがとうございます。

大分時間が、私の回しがものすごく悪くて、全員が2巡目をしゃべる時間が大分なくなってきたんですが、やっぱりどうしても言っておきたいという方いらっしゃいますか。

濃沼さんにちょっと、最後は締めていただきたいと思うんですが。

どうぞ。

山吉さん：私たちは、一応自助努力が最大の重点だと思うんですね。だから、自助努力しないと共助ができないし、公助に対するサポートもできないというふうに理解をしています。

自助努力に関しまして、いろいろと防災に対する考え方とか、パンフレットですね。それから川崎市の「備える。かわさき」とか、それから男女共同参画センターの女性の立場であるとか、防災部とかも全部、全世

帯に配りました。

それで、それに対するアンケート、我々が施策を講じたものに対して、どうレスポンスがあるかアンケートしたんです。結果が出ました。やはり自治会のマニュアルとか防災の考え方ですね、これは皆さん80数パーセント。女性の参画は、男性も回答していますから読んでいないという方が多かったです。だから、そういうふうにはまず徹底をいかにするかということが大切です。

それ、参考になったというので、備蓄をどれだけしていますか、食糧、水、これは大体80%備蓄しています。ところが、一番大切な簡易トイレ、凝固剤、これは凝固剤の共同購入もやったんですけど、今のところは大体25パーセントというレベルですね。

ですから、こういうのをいかに徹底できるかということが避難所へ負荷がどれだけかかるかということになってくると思っております。

市長：ありがとうございます。

濃沼さん：私は非常にオーソドックスな紙を出させていただきましたけれども、行政との住民とのパイプ役ということで出させていただきました。これは、各避難所には無線の設備があります。それで、先ほど申し上げましたように、18の地区でそれぞれ地区長さんが住民に何かあったときには相談に乗るという立場になっているんですけれども、それと私も町会とのパイプをつなぐ手段がなかなか画一できない。万一、災害の場合は携帯電話等、なかなか使えない状況になります。それで、一時期無線でお互いに地区長さんと町会とを結ぼうというふうに思ったんですが、維持費とか、そういうのを考えると大変厳しい状況なんです。

それで、何かあったときには町会や何か、こういうところ、行政から何か御相談があったり、それに対して答えるためには、状況を把握していないといけないうんですけれども、そういうことがなかなか現状できないということで、その辺を何とか費用がかかる話なんですけれども、考慮していただくとよくなるんじゃないかというふうに思いまして、こういうふうにかかせていただきました。

市長：ありがとうございます。

これまでの議論を踏まえてですね、区長として考え方というか、まとめのような話を区長なりのコメントをいただきたいと思えます。

区長：本当に今日は皆様、様々な貴重な意見をありがとうございました。皆様の御意見を聞いていて、やはり日頃からの地域でのコミュニティーのつくりとか、それから本当に顔の見える関係づくりというのは、やっぱり何よりも大切だと感じておりますし、それは防災に限った話ではない、でございます。

先ほど、千葉さんからもお話ありましたように、まさに地域包括ケアシステムを今川崎市では、多摩区でももちろん取り組んでいますけれども、そういった中でも、やはりふだんから地域でのコミュニティーがまさに人のつながり、それから地域とのつながりを持つことで、初めてまさにお互いに助け合う、お互いが顔が見える関係づくりが何よりも大切だということは、もう皆さんからの指摘もございまして、我々もそう思っています。

そのために、これから我々は何をやらなきゃいけないか。まさに地域の方々にまず防災のことについては、自分ごととして捉えていただくための取組、そして日頃から防災訓練や自治会活動などを通じて、お互いが顔が見える関係づくりをより進めていくための取組を我々は一生懸命やらなければいけないというふうに思っております。

実は、今日はいろいろな貴重な御意見いただきましたので、これを今後の防災の取組などで活かしていくためにはどうしたらいいかということの一つに、今日この区民車座集会の場を使った、デジタルストーリー

テリングを、これから我々でつくりたいというふうに思います。

それを活用して、区民の皆様にも今日出していただいた意見とか考え方、思いなどを共有してもらおうという、そういうことがその次につながるのではないかなと思っておりますので、そのデジタルストーリーテリングをつくった上で、今後ホームページとか、それから出前防災講座など、そういったところで活用して、区民一人ひとりの防災意識の向上と、それから地域防災力の向上といったところを取り組んでまいりたいというふうに思います。

今日は本当に、皆様方から貴重な意見をいただきました。ありがとうございます。それをまた活かしていきたいと思っておりますので、是非よろしく願いいたします。

市長：どうもありがとうございました。

ちょっと、私最後に、お時間になりましたのでまとめさせていただきたいんですが、先ほど山吉さんがおっしゃっていただいたように、災害のときになったら、まず自分の備えというか、自分で守らなくちゃいけないという、この備えをちゃんとやっていただくことが、一番の大前提なんですよね。それができていないと、一気に避難所だとか、いわゆる共助・公助のほうとかにどんどん負荷がかかってくるということでありますから、まず自分のところはちゃんとやるという意識をやっていくためには、それは市も一生懸命これからも伝わる広報をやっていく、あるいは訓練を後押ししていくということはやっていかななくちゃいけない。これはしっかりやりたいと思います。

でも、一番やっぱり効くのは、隣の人から、御近所さんから、あるいは知り合いから言ってくれるというのが、一番訴求力があるので、それを今日お集まりの皆さんにもやっていただいていると思いますが、さらにその取組を多摩区なり、あるいは全市民なりと、それはやっていきたいなと思います。

そしてもう一つは、千葉さんからお話あったように、自分たちの地域のことは自分たちでやるんだけど、例えば町会がやっていて、あるいは社協が、学校がというふうな中で、消防団がというふうな形、こういう人のところに子供関係をやっている、高齢者関係をやっているというふうなのを、どうやって同じ地域のプラットフォームの中で皆で重なり合ってやっていくかということが、本当に大事なというふうな改めて思わせていただきました。

それには、人だけのネットワークだけではなくて、いわゆる施設的な、コメリさんとかセブンイレブンさんとか、保育所だとか高齢者施設、こういった施設の場のシェアというか、共有ということも意外とあるよねと、自分たちの地域って、どういうふうに、どの地域を私たちの地域というのかというのは、人それぞれちょっと解釈があると思いますが、例えば小学校区内ぐらいの小さな単位で考えると、あそこにあの施設あるよね、あそこはいざとなったら使わせてもらえるんじゃないかなということ、日常的に寺澤さんがやっていただいたような形でつないでいくという取組を、やはりこれからもっと加速させていかななくちゃいけないということだということを、改めて思わせていただきました。

今回、それぞれの地区では会っている、顔の見える関係ができているんだと思いますが、こういう形で地区を越えて集まってくると、なるほど、こういうやり方もあるのかなというふうなのが見えてくると思うので、これを多摩区全体に共有する、あるいは市全体で共有していくということが、本当に災害に強いまちづくりになるし、いざとなったら災害に強いまちづくりだし、平時のときは、本当に地域に、ここは本当に安全だなという、安心だなという地域づくりそのものになるんじゃないかというふうに思います。

本当に、ちょっと運用が悪くて皆さんがしゃべり足りないという部分がたくさんあったと思うのですが、御容赦いただきまして、今回の車座集会を終了させていただきたいと思っております。

皆さん、御協力ありがとうございました。

(拍手)

司会：ありがとうございました。以上をもちまして、第37回区民車座集会を終了させていただきます。
お忘れ物のないよう、お気をつけてお帰りください。お帰りの際には、受付時にお渡ししたアンケートの御
記入にご協力いただき、出口にいる職員にお渡しください。

今日は、御来場いただきまして、まことにありがとうございました。